

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2025 年

No. 167

2025年2月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3富山房ビル5階 Tel.03-5801-6788 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2025 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2024・報告…………… 1	多様な性のゆくえ④…………… 8
"めぐみ"を生きる⑪…………… 6	今月のブックガイド…………… 9
わたしたちの性教育アクション⑬…………… 7	JASEインフォメーション…………… 10

● SEE 性教育アカデミー 2024・報告

性教育や支援のための SAR プログラム 子どもの性の安全・安心を高めるために支援者ができること

はじめに

SEE (Sexuality Education & Empowerment) は、概ね年2回のペースでSEE性教育アカデミー(協賛: 日本性教育協会)を開催している。From What to Learn to How to Learn (何を学ぶかから、どう学ぶかへ)をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だけでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

これまでSEEでは、諸外国の代表的な研修内容を紹介しながら、さまざまセミナーを行ってきた。

2024年11月17日「子どもの性の安全・安心を高めるために支援者ができること」をテーマに行われたSARプログラムのセミナーもその一つである。「性教育や支援のためのSARプログラム」のセミナーは、今回が3度目になる。

1回目は2022年2月27日(日)に「みんなで考えよう 私たちのSARプログラム」をテーマに行わ



れている。同じ年の秋、11月5日(土)には「性と対人関係について語る安全な場づくり～SARにつなげるネットワーキングスキル～」をテーマに、大阪公立大学I-site なんばで開催されてきた。いずれもセミナー時間は約6時間のワークショップ形式の研修であった。

講義：SAR プログラムと諸外国の実例

2024年11月17日(日)に開催された今回のセミナーは、まず東優子氏(SEE共同代表・大阪公立大学教授)から、「SAR：性に対する態度をみなおす・再評価する・再構築する研修について」の講義がなさ

れた。

SAR (Sexual Attitudes Reassessment) は、諸外国では、性を扱う専門職（性教育・セックスセラピー／カウンセリングなど）の資格認定にあたり、自身の信念・態度・価値観・偏見と向き合い、再構築（必要な修正・改善を図ることを含む）するための研修プログラムである。

東氏は、「SAR の歴史」、「研修の目標」、「研修のメリット」について、以下のように整理して示した。

【SAR の歴史】

セクシュアリティとヘルスケアの専門家の研修方法として、1970 年代から実施されてきた（文献で確認できる最も古いものとしては、サンフランシスコの The National Sex Forum が 1974 年に開発した SAR セミナー）。

【研修の目標】

- ・自身の信念、態度、価値観、偏見に自覚的になる。
- ・自身の態度や価値観が仕事や個人にどのような影響を与えるかを理解する。

※自己探求・自己理解（のプロセスや体験すること）が目的であり、知識情報の伝達（学習）や個人的な問題解決を目的としたセラピーではない。

【研修のメリット】

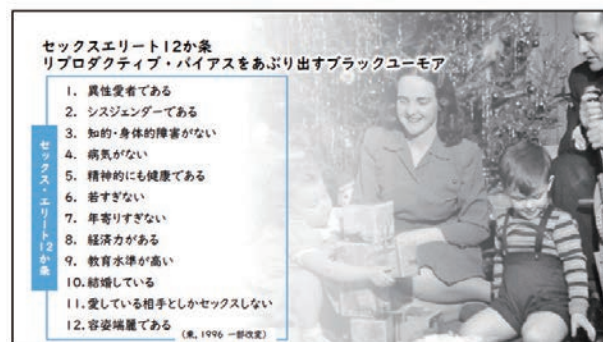
- ・性の健康を扱う専門家に必要な快適さ（comfort）→仕事上あるいは個人的なコミュニケーションスキルの向上。
- ・個人としての成長と健全な人間関係の構築。

SAR 研修は、自分自身がどういう信念、態度、価値観を持っている人間なのかを知り、偏見や価値観を脱構築し再構築していくためのプログラムで、「自分と出会い直す研修」とも言える。

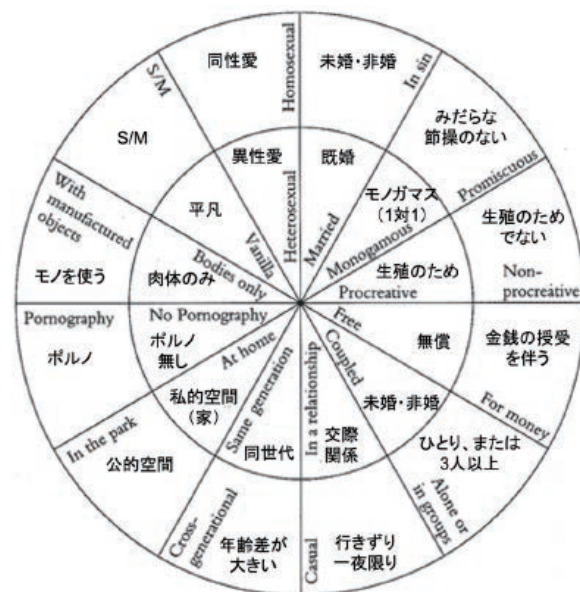
東氏は、性科学者のミルトン・ダイヤモンド（Milton Diamond）博士の言葉を次のように紹介した。
——性を扱う際に気をつけるべきポイントとして、まず性に関して、ある種の感情や態度が伴わない「事実」は存在しないこと。そして、一般的な話題や全体的な傾向について話したり、教えたりすることの必要性がある一方で、一人一人の人間は「平均」と一致することもあれば、劇的に異なることもあり、その人の問題を個別化することが重要であること。さらに、「何がどうである（事実）」「何がどうあるかもしれない（可能性・仮説）」「何がどうあるべき（価値）」のそれ

ぞれは明確に区別して語られなければならない——。

東氏は、性に対する価値は、常に意見が分かれ、流動的なものであるといい、リプロダクティブ・バイアスをあぶり出す「セックスエリート 12 か条」というブラックユーモアとゲイル・ルービン（Gayle Rubin, 1984）の作成した「セックス・ヒエラルキー」の解説を行った。ここでは、その画像を以下に示す。



ブラックユーモアとして提示された「セックスエリート 12 か条」



セックス・ヒエラルキー (Rubin, 1984)

セクシュアリティの多様性は、性自認や性的指向だけではない。性には「自然」や「不自然」という価値が付与されており、時代によっても異なるもので、個人や社会の都合で変わっていくことを知っておく必要がある、と東氏はいう。

『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の 15～18 歳の「自身の価値観、信念、態度を知ることは、それらに一致する性的行動をとるために必要である」という学習目標は、生徒だけでなく専門職にとっても求められる。自分自身の価値観、信念、態度と異なる

価値観や態度と対立したときに、どのように考え、価値観の違いによって起こるさまざまな対立があることを事前に考えておく必要がある。性を扱う専門職にも「価値観」の振り返りと脱構築と再構築が求められるのは、性教育へのアプローチの変化ともかかわっている。価値観や道徳観を教え込むのではなく、価値ニュートラルな態度を養うことが求められる、と語った。

講義の区切りで、野坂祐子氏（SEE 性教育アカデミー共同代表・大阪大学大学院教授）の司会進行で、4～5人1組のグループに分かれ、自己紹介と講義への感想や意見交換が10分ほど行われた。その後グループの代表による質問や感想が語られた。

東氏から質問・感想への返答があり、引き続いてニュージーランド政府作成の性教育の動画、オーストラリアのカーティン大学大学院の SAR プログラムのビデオ上映ほか、諸外国の SAR プログラムや東氏自身が参加した SAR プログラムセミナーの内容の紹介などが行われた。

グループワーク「私が受けた性教育」

午後からはワーク形式の学習に移った。安全な場で対話を行うため、グループワーク開始前にグランドルールの説明（個人的な情報は研修の外に持ち出さない、他の人の発言には耳を傾けましょう、お互いの意見は尊重しましょう、時間を守りましょう）があった。

吉田博美氏（SEE 事務局長・駒澤大学学生相談室カウンセラー・臨床心理士）をファシリテーターに、小グループに分かれ、「私が受けた性教育」をテーマにした話し合いを行った。

このグループワークには、次のような事後感想が寄せられている。

- ・「日本の性教育は…」、という大きな主語で語られることはこれまでもあったが、「私が受けた（受けたかった）性教育」という切り口で話を聴き合う機会は（あるようで）少なかった気がした。自身の経験からの価値観を振り返ることができた。
- ・グループトークをすることで、性教育にふれるきっかけに個人差があり、今日、こうして、性教育に関心を持って参加している人が持つ特権を考えさせられた。特権に気づいてる私たちが、何とかしないとという気持ちにさえた。



「セクシュアリティ一問一答サークル」のグループワーク

- ・何度も何度も振り返るごとに思い出すことが増えていくので、一度ならず何度もこういった機会を自分に設けていきたいと感じました。
- ・子どもの頃は年代的に性教育がなんとなくタブーな感じでしたので、もっと学んでおきたかったことはありました。

午前の東氏の講義を踏まえた話し合いは、参加者に少なからずさまざまな思いを与えたようで、次のグループワークにその成果が如実に現れた。

セクシュアリティ一問一答サークル

休憩を挟んで、同じく吉田氏の進行で、「セクシュアリティ一問一答サークル」をテーマにしたグループワークが行われた。

最初に、次のようなワークシートが参加者全員に配布された。

「セクシュアリティ」一問一答サークル ワークシート

- 1 いま私が感じているのは
- 2 私の家で、性の話は
- 3 もし誰かがセクハラを受けていると知ったら私は
- 4 交際中にふたりで盛り上がって性的な写真をとることは
- 5 暴力が起きるのを防ぐのに人々がするべきことは
- 6 デートを安全にする方法の一つは
- 7 もし私が虐待的関係に陥ったとしたら、私がうち明けるのは
- 8 誰が良いパートナーであるのかを決めるのは
- 9 思春期は
- 10 子どもに伝えたいソーシャルネットワークの使い方は
- 11 私が人間関係で大切にしていることは
- 12 今日、私が学んだことは

日常生活にある性にまつわる体験を振り返ることを目的に、12問のテーマについての話し合いを行った。小グループでは、それぞれの個人的な

幼少期や思春期、そして現在の体験、思い、価値観から幅広い意見が出された。事後感想からその多様な受けとめ方が見えてくる。

- グループのみなさんの考えを聞いて考え方が1つではないことを改めて実感しました。
- 他の質問項目でもやってみたかった。楽しい。人の話を聞くことで、自分のおもいこみに気が付けたり発見があった。
- 一問一答の方法で、自分の言葉による発信を繰り返すことで、自分自身が持つ関係性や価値観を自ら自覚し、自分の中の軸に気づくことができた。
- このような形のワークを初めて体験しましたが、皆さんが短い回答の中に印象的な表現をたくさん話されていて、様々な価値観と表現との出会いになりました。
- 自分の価値観や態度を振り返ることを可能にする質問になっており興味深かったです。参加者同士でちゃんと話してちゃんと聞くというルールがあることで安心して話せたように思いました。
- 設問が揺さぶられるものであった中、他の参加者の話を聞きながら自分の番の答えを考えていたような気もして頭がグチャグチャしてしまった。サークルで話す前に、自分との対話（内省）の時間があればよりよかったなと思った。5人グループだと後半話す人は「皆さんも仰っていたように……」と先に話した人の内容や価値観の影響を受けてしまっているなとも思ったので、3人の小グループでもいいのかなとも思った。
- ぜひ、自分たちの研修会に取り入れたいです。

私にとってのセクシュアルコンパッションとは

そのあと、全体のサークル（円座）になり、小グループで話し合ったことなどをもとに「私にとってのセクシュアルコンパッションとは」をテーマにした話し合いが行われた。

コンパッション（おもいやり）という言葉をもとにどのように解釈するか、とまどい悩む場面も見られたが、さまざまな意見が出された。

このセクションでの参加者の事後感想を紹介する。

- 性のおもいやり？ のイメージが難しく感じた。対



「私にとってのセクシュアルコンパッションとは」の発表

セクシュアリティについて、思いやり？ 思いやりって相手がいるイメージで、セクシュアリティは、自分のものだし、自分に対しての思いやり？ とぐるぐるした。未だに、心に残っているが、結局答えのないものかと思った。

- この内容は、自分にとっての課題だと思った。言葉になるようではない。人の意見を聞いて、そうかもと思うけれどもはっきりしない。そんなプロセスも大事なんだろうと思う。
- 自分自身も含めて参加者みなさんの性に対する経験や価値観を聴ける貴重な時間だった。自分にとっての安心・安全ってどういうことなのかを改めて問い直すきっかけになった。

おわりに

セミナー参加者の変化を肌で感じられる場面が多くあった。初めて顔を合わせるメンバーも多かったが、お互いの話を聞き、感想を共有するなかで、次第に表情がやわらいでいくのが印象的でもあった。

参加者の変化の様子が分かる事後感想と今回で3回SARセミナーに参加してきた筆者の感想を最後に記したい。

まず、参加者の感想から。

- 8～10年ほど前、学校で教員をしていた頃に「クラスに1人はLGBT当事者がいる」と言われ始めましたが、当時はまだ「(同じ割合で考えるのなら)職員室にも当事者がいるんじゃないか」という発想や声は上がってきませんでした。かくいう私自身も「自分がそうである」とは到底言い出せず、同僚教員の言動や反応（新たに考えたり配慮したりしないといけなことが増える…というネガティブなニュ

アンスや不安を孕んでいた)に居心地の悪さを感じながら、「今の学校では安心して働けないかもしれない」という孤立感から教員として生きる道を諦めました。「もしもその頃に包括的性教育や教育者向けのSARプログラムが浸透していたら……」、「一緒に考えて闘える仲間関係を職場で作ることができていたら……」。今日のセミナーは、そんな「What if……」を妄想せずにはいられないぐらい深い内容で有意義な時間でした。学校現場を離れて地域教育の現場で今は活動していますが、これからは仲間作りもしながら「子どもから大人まで、安心して“多様な性”を生きられるまちづくり」を目指してみたいなと思いました。

- 他の参加者の方と対話しながら、自分自身とも対話するセミナーとなっており、とても面白かったですし、楽しかったです。自分自身の価値観がどのように形成されてきたのか、価値観は対人援助の現場でどのような影響をもたらしているのか、といったことを振り返るトレーニングの機会はとても大切だと思いました。この度は貴重な機会をありがとうございました。
- 迷わず申し込んで間違いなかったです。直に聴いて触れてみて感じて、それを自分なりの言葉で表現すること、さらにはそれを全て受け入れてもらえるという安心感……。私は子どもたちにこれを環境として整えたいのだ、と改めて確認することができました。ありがとうございました。
- 性への価値観を自己覚知する学びの場がないので、参加してとても良かったです。ワークショップをまた開催してほしいです。交流会があれば尚よかったです。

- 何度も繰り返し受けたいと思った。特に、現場が多く、日頃子どもと向き合っている活動なので、また時間があれば参加したいです。

寄せられた感想から、このSARプログラム、ワークショップという形式のセミナーに参加し、そこで話し合うことで、自分の価値観、固定観念が揺さぶられている様子が垣間見られた。筆者も参加者の多くが持ったであろう「自分の価値観、固定観念」の再構築の必要性を痛感した。

SEE 性教育アカデミーのセミナーは、From What to Learn to How to Learn (何を学ぶから、どう学ぶかへ) をモットーにしている。その中で、よく使われる言葉に、「脱構築」、「再構築」、「ニュートラル」がある。

「脱構築」は、フランスの哲学者ジャック・デリダ(1930～2004)が使った用語で、英語でディコンストラクション(deconstruction)。デリダの脱構築的な考え方は、ジェンダー学関連書の中で、社会に大きな影響を与えたと言われる『ジェンダー・トラブル』の著者であるアメリカの哲学者ジュディス・バトラーのバックグラウンドにあると伝えられている。

私たちが当たり前に考え使っている二項対立、例えば男と女、自分の価値観と他人の価値観といった既存の枠組みや体系を解体し、優劣や違いの判断をいったん保留し、新たに構築し直すことを意味する。つまり、一度「ニュートラル」状態を作り「再構築」する作業、それを行っているのがSEE 性教育アカデミーのセミナーなのだというのを、今回のセミナーに参加し再認識した。

参加者はスタッフを含めて23名であった。

(文責・斎田和男)

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室 について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧予約】事前に電話で予約が必要 [tel 03-5801-6788]。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】月曜日～金曜日 11:00～17:00

【休室日】土曜日、日曜日、祝日、年末年始 ※その他、臨時に休室することがあります。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法



← 資料
検索

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、セクソロジー、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、国内学術誌、国際(海外団体資料・海外学術誌)、高齢者・家族問題、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、絵本・写真集、ダイヤモンド文庫、団体資料・手引き・白書(都道府県資料、大学関連資料、官公庁資料など)ほか。 https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy_N7GNQ_WQaeg

めぐみ を 生きる

負けない、めげない、あきらめない

【第11回】名簿変更から再確認できたこと

前回は、制服に関する課題と取り組みについてお話ししました。

制服の存在と同様に、世の中にある「らしさ」そのものが悪いとは思いません。10年後も100年後も、世の中の「らしさ」は変化すれども、なくならないでしょう。「らしさ」が、特定の属性に基づいて誰かから押しつけられたり、誰かに押しつけたりすることが、生きづらさの原因のひとつになっているのではないのでしょうか。世の中にある様々な「らしさ」を自分で選んだり、試したり、組み合わせたりすることで、「自分らしさ」に変えていくこともできるのだ、と伝えたいです。

「らしさ」の表現方法としては、髪型や身につけるアイテムもあります。それらを制限する服装・頭髪等の規定がある学校が多くあり、その枠組みが制度上の「性別」に基づいていることが、よくあります。これらについても、本校では見直す議論が生じ、「性別」による枠組みが取り払われ、より柔軟なものに変更されました。制服という「見た目」に大きく関わる部分の議論を経ていたことが、見直しがスムーズに進んだ理由のひとつだと考えています。つまり、教職員の「不安が先行してブレーキ」がかかるようなことがなかったのです。例えば、男子が女子のような服装や髪型をしていたら「いじめられる」のではないかと、という不安には、止めるべきはいじめる行為であるはずだという認識が共有されていました。また男子がスカートなんて…という不安にも、特にトランスジェンダーは社会生活上の性別を自認に合わせている場合もあるという当事者のリアルを知ってくれていたため、ステレオタイプに基づく声が先走ることがありませんでした。大切なことは、その選択で何を表現するかであって、そのことで誰かを傷つけたり、誰かが傷つけられたりする言動が生じないよう、人権感覚を育んでいく

Profile 永井 恵 (NAGAI Megumi)

トランスジェンダーとしての生き方をオープンにし、公立中学校の教員として生きる。多様な性のあり方やジェンダー平等の取組を、人権教育の視点から続けている。



ことなのだと思います。

話を名簿に移しましょう。名簿を混合にするために、実際のところ制服を見直すよりも時間を要しました。校務支援システムでも、問題なく混合名簿を取り扱える中で、変更が進まない理由は他にありました。ひとつは、名簿に関わる場面や書類が多岐にわたるため、年度が変わるタイミングでしか変更しづらいことです。年度途中での変更は入力や処理のミスを誘い、事務的負担だけでなく、心理的負担や事故のリスクが生じます。もうひとつは、中学校でも生年月日順という習慣でした。生年月日順のまま混合にしたなら、使いづらい名簿になるのは明らかです。習慣に基づいて校内の様々な書類の作成要領が定められていたことが、ハードルでした。また、男女別名簿が必要な場面を想定して「2種類の名簿（出席番号）があるのは混乱する」などという声もありました。確かに、学校生活では身体の性別で区別することが必要かつ合理的な場面はあります。しかし、それが学校生活全体である必要はないはずです。名簿が男女別であることが、意図せず何を教えているのか、「隠れたカリキュラム」について説明したり、自認と異なる側に割り振られ続ける苦しさや、区別されることに違和感を訴える声を伝えていきました。混合・五十音が当たり前になりつつある状況やジェンダー平等を目指す動きも後押しとし、書類作成のルール見直しの進展を見届けながら、やっと名簿の切り替えにこぎつけました。現在では、混合名簿で統一した運用が行えていますし、男女別名簿が必要な場面があれば、担当者がその場に応じて作成しているに過ぎない状態です。

今でも「男女混合」名簿という表記が目につきますが、「男女」を冠していることに違和感を持つのは、私だけでしょうか。男女を混ぜただけではなく、多様なあり方が混在している。そういう意味で単に「混合名簿」でよいのではと、いつも思っています。名簿の変更を通して、「性別」だけではない多様な属性や個性をもつ「一人の人間」として尊重する姿勢を再確認できたと思います。

今回は、これまでを振り返り、学校全体として取組が進められた理由についてお話ししたいと思います。

わたしたちの 性教育 アクション

「子育て支援と性教育」を柱に

「沖縄のすべてのいのちを応援したい！」という想いの助産師を中心としたメンバーで2013年に発足した「一般社団法人 沖縄いのちにエールを贈る会」は、「子育て支援と性教育」を柱に、離島を含む沖縄県全域を対象に活動しています。

これまで、市町村の委託を受けて、マタニティ教室やパパママ学級、母子支援を展開し、こどもたち向けには、保育園児から高校生まで「いのちの授業」を届けてきました。「命の誕生」に関わってきた助産師だからこそ伝えられることを強みとし、さまざまな世代に命の大切さや性に関する正しい知識を伝えてきました。

オトコの悩みはオトコに！

これまでの活動と並行して、令和4年度より沖縄県事業である「沖縄こどもの貧困緊急対策事業 保健に関する相談支援事業」を受託。「みんなの保健室おきなわ」と銘打って、こどもたちが自分の身体や性に関わる悩みを、直接助産師に相談できる仕組みを展開中です。また、小さな離島を含む県内全域に出向き、こどもの居場所や県立高校の居場所を中心に、性に関する講座やワークショップを実施しています。年齢に関係なく、こどもたちは皆、「命」や「性」に大いに興味を持ち、とても前向きに取り組んでくれます。それがまた、私たちの原動力にもなっています。

さらに今年度は同じ事業の中で画期的な挑戦をしました。「男性による男性のための性教育講師」の養成です！これを仕掛けた理由のひとつが、性教育の講師のほとんどが女性であるという点です。思春期男子が、女性講師に悩みを打ち明けるのはハードルが高く、「オトコの悩みはオトコに！」と考えました。また、沖縄の課題である「若年妊娠」についても、「男の性と責任」について、同性から語ってほしいと思いました。

#23

沖縄のすべてのいのちを 応援するために

一般社団法人沖縄いのちにエールを贈る会



「男性による男性のための性教育講師養成講座」の様子

本講座修了者には「セクシャルエデュケーション★サポーター（セクエデ★サポーター）」の称号を付与し、次年度以降、助産師等の相談員とペアで性教育の現場に参加し、経験を積んでいく予定です。全国的にも先駆的な取り組みと自負し、「沖縄発！性教育男性講師養成講座」が、世に出ることを期待しています！

性をオープンに語れる土壌を若者の世代に

「セクエデ★サポーター」を「相談員」に育てていくことが、大事なミッションのひとつになりますので、フォローアップ研修なども組み立てていきます。加えて、2024年度に実施した「沖縄の若者の性行動、性教育の現状を調査するアンケート」の調査報告を大学とのコラボレーションにより、当事者世代をフィーチャーして実施することで、「性をオープンに語れる土壌」を若者世代に広げたいと目論んでいます。

活動の継続に重要なのは、「予算の確保と人材育成」です。私たちの活動を積極的に発信することで、共感する仲間を増やし、小さな声が大きな声になることで、「正しい性教育」を受けることは「こどもの権利」だと伝えていけるよう、より新しい取り組みや工夫が必要だと感じています。（文責・知念菜穂子）

一般社団法人沖縄いのちにエールを贈る会
代表理事 知念菜穂子

「沖縄のすべてのいのちを応援する」という想いから2013年に発足。妊娠・出産・子育てを支える活動を行い、沖縄全域で「いのちの授業」を届けている。沖縄の地で人々とつながり、さらなる可能性を広げることを目指している。

<https://inochi-yell-okinawa.com>

マジックの引退と復活

NBA（全米プロバスケットボール協会）のアービン・マジック・ジョンソン選手は1991年11月7日、所属チームであるロサンゼルス・レイカーズの本拠地で記者会見を行い、現役引退を発表した。NBAの91～92年シーズンの開幕直前のことだ。

記者会見の様子は日本でもTVニュースで報じられた。マジックによると、新しい保険に入るために健康診断を受けたところHIV陽性が判明したという。

米国では1990年2月、地下鉄の落書きで有名なストリートアートの画家、キース・ヘリングがエイズで亡くなっている。マジックがNBA引退を発表して間もない1991年11月24日には英国のロックスター、フレディ・マーキュリーの死亡が伝えられた。

米国内で初のエイズ症例が公式報告されたのは1981年だったから、マジックの引退発表はその10年後ということになる。HIVの流行がもたらす社会的な差別やスティグマと闘ってきた著名なエイズアクティビストたちが10年間の苦闘を経て、次々に亡くなっていくという最も困難な時期でもあった。

HIVに感染した人の90%以上が10年前後の期間を経て、エイズを発症し、衰弱して死に至ると考えられていた。複数の抗レトロウイルス薬を組み合わせると高い延命効果が得られる治療法が注目を集めるのは、さらに5年後の1996年のことだ。

「NBAのシーズンは激しいストレスのもとで半年以上続く」。マジックは引退の理由をこう説明した。会見のニュースを観た人も引退は当然と感じたのではないか。

ただし、1980年代にレイカーズを5回もNBA優勝に導いた伝説の名選手マジック・ジョンソンの活躍は、そこで終わったわけではない。HIV感染についての知識を多方面から得たマジックは、自らの体調も考えNBA復帰は可能だとひそかに考え始めていた。

1992年のNBAオールスターゲームは2月9日にフロリダ州オーランドで行われた。ファン投票の結果、マジックは東西対抗形式のこの試合で西軍メンバ

ーに選出され、先発出場した。結果は25得点5リバウンド9アシストの大活躍で、MVPも獲得している。同じ1992年の夏にはバルセロナ五輪が開かれ、NBAのスター選手を集めてドリームチームと呼ばれた米国代表は全試合、圧倒的な強さを見せて金メダルを獲得している。シカゴ・ブルズのマイケル・ジョーダン、ボストン・セルティックスのラリー・バードらとともに、マジックもその夢のチームの中心だった。

こうなると次はNBA復帰ということになる。マジック自身もそれを望んでいたようだが、こちらはすんなりと実現したわけではなかった。

どうしてなのか。当時は記事を書くためにかなり調べたつもりだったが、最近では記憶力の衰えが激しい。時間が一気に跳んで恐縮だが、NBAならぬ米大リーグでは昨年（2024年）10月30日（日本時間31日）、ニューヨークのヤンキースタジアムでワールドシリーズ第5戦が行われ、ロサンゼルス・ドジャースが4勝1敗で優勝を飾った。マジックの復活について、改めて振り返ってみたいと考えたのは、試合終了直後に行われた表彰式のテレビ中継で、大谷翔平選手のすぐ後ろにマジック・ジョンソン氏がちらっと映っていたからだ。

えっ、何で？ 日本にも中継されていた画面では一瞬のことだったので、錯覚かとも思った。だが、後で調べてみると、マジック・ジョンソン氏は2012年からドジャース球団の共同経営者に加わっており、ロサンゼルスからニューヨークに駆け付けていたのだという。現在の年齢は65歳。HIV感染と現役引退を発表してからすでに33年が経過している。

最初に現役を引退してから、オールスターゲームでの活躍、そしてドリームチームによる五輪金メダル獲得までは9か月しかたっていない。立ち直りが早いのは、名選手の証拠だろう。

だが、NBAの現役復帰が実現するまでにはさらに4年の歳月がかかっている。それはどうしてだったのか。もう少し調べ直してみよう。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

言葉にならない痛み、痛みを伝える傷

「いつもと同じほんの些細な出来事」でも、蓄積した鬱憤があふれる母親の予測不能な爆発。何が起こるかわからないという緊張と不安は、わずか3歳の子どもに「生きていかななくてはいけないことへの恐怖」を植え付けた。時折みせてくれる優しさや愛情への期待。だからこそ「母の仕打ちはこころにこたえた」という著者は、複雑性PTSDを患いながら、東京大学を卒業して看護師になる。その陰には、オーバードーズと救急搬送されるほどのアームカットの傷がある。

複雑性PTSDは、犯罪や事故などによるPTSDと異なり、幼少期の逆境体験によって生じる。不安定な養育環境や真綿で首を絞めるような支配など、わかりにくいトラウマであるがゆえに、子どもは混乱と自責感をかかえて育ち、情動調整不全に苦しめられる。

わかりにくさは、トラウマの性質だけではない。その苦痛は、いわゆる頑張り屋や良い子、自他を傷つける行動として表出される。「オーバードーズは胸をプレス機で潰されるかのようなひどい感情を意識ごと飛ばすのに役立ち、アームカットは切る痛みや流れる血の赤さと温かさによっていつときでも意識の向く方向を自分の感情から体の感覚へとそらすのに役立つ」と著者が述べるように、自傷行為は生き延びるための手段である。しかし、そんな彼女が受けたのは精神科病院での拘束であり、〈人間としての私〉が力任せに破壊される体験であったのだ。

副題が「絡まった糸をほどこうとした人の物語」と過去形で記されているように、著者は本書の刊行目前に享年26で逝去した。「絡まった糸」をほどくために、かつての日々について、母親と兄に聞き取りをしていく著者。母親もまた、夫（著者の父親）からの威圧や支配のなかで、精神的な余裕や判断力が失われていったのだっ



傷の声

絡まった糸をほどこうとした人の物語

齋藤 塔子著

発行 医学書院

定価 2,200 円（税込）

た。ルールの押しつけや暴言、行動・経済面での制約。父親による「暴力」であるが、言語化しにくい険悪な雰囲気や家族を蝕んでいく。しかし、母親からは、父親の理不尽な態度は語られても、母親自身が子どもたちにした言動が思い出されることはなかった。

さらに「あの家の空気を一緒に吸って育った」兄と話すことで、「二人の力をもって」言語化できるかもしれないという期待は無残に打ち砕かれ、ほどこうとした「糸」はより複雑に絡まっていく。逃げられなかった母親の「弱さ」を指摘し、過去の体験は「糧となって今の自分に繋がっている」と語る兄との溝は、彼女にとって大きな絶望と感じられたのではないか。子ども時代の兄は、ストレスのはけ口を妹である彼女に向けていたというのに。

「忘却」という否認は、母親や兄にとっても、その環境を生き抜くうえで必要な対処だったのに違いない。しかし、「忘却」する人々のなかで、ひとりでその記憶をかかえて生き続けなければならない人がいる。トラウマの記憶は、決してなかったことにはできない。誰かが手放した糸は、誰かのしがらみとなり、その身を過去に堰き止める。家族が手を差し伸べることなく、もつれてしまった糸は、社会が解きほぐすしかない。脆く、鋭い、トラウマの糸に触れる支援者もまた傷つくものだ。支援者もその痛みを否認せずに行われるように、誰もが傷をケアされる必要がある。

〔解説〕で、松本俊彦医師が「命懸けで書かれた自傷の教科書」と述べるように、渾身の力を振り絞った文章から、自傷の背後にある痛みをまざまざと知ることができる。私たちは学ばなければならない。微かな「生きたい」の声をかき消すことなく、繋がり続けようとすることを。そして、私たちは反省しなければならない。ひとり分の人生を生きるだけで苦しい人に、「教科書」まで書かせてしまった怠慢を。

（大阪大学大学院教授 野坂祐子）

北東北性教育研修セミナー 2024

主催：北東北性教育研修セミナー実行委員会 協賛：日本性教育協会
協力：一般社団法人 Broken Rainbow-japan 青森レインボーパレード実行委員会

アクティビズム
アカデミズム & へ、ようこそ

性の権利を尊重する社会をつくる 活動と研究

～青森での10年を振り返り、未来へつなぐ～

2025年3月22日（土） 14:00 - 16:30

場所：青森県男女共同参画センター アピオあおもり 大研修室

参加費：対面現地／無料 オンライン／1,000円

<https://activism-academism.peatix.com>

⇒
申込み
フォーム
⇒



<セミナー趣旨>

2014年から2024年までに青森を拠点に行われてきたLGBTQ+に関する性の権利に関する活動を振り返る。

青森を拠点に行われた、当事者たちの居場所づくり、地方におけるプライドパレードのはじまり、相談支援、同性婚を可能にするための働きかけ。そして青森を拠点とした全国各地での活動としての性暴力に関する政策提言や人材育成。こうした活動がどのような思いと共に青森で生まれ青森や他の地域の人々、特に当事者たちにどのような影響を与えているのだろうか。

これらを実施してきた一人である岡田実穂（活動家）と、これらの活動を見守り続けてきた東優子（大学教員）がそれぞれの立場・視点で対談する。当事者たちを中心においた権利擁護がどのような思い、歴史の中で培われていくのか、未来に向け、アクティビズム&アカデミズムの「楽しさ」も伝えたい。



岡田実穂

一般社団法人 Broken Rainbow-japan 代表理事

東優子

大阪公立大学教授

身体のインテグリティ講座シリーズ II

Interdisciplinary Symposium on Genital Modifications 性器切除・改変に関する学際シンポジウム

2025年3月1日(土)・2日(日)

両日、対面とオンラインのハイブリッド開催 (zoom利用)

会場 大阪公立大学 i-siteなんば

参加費無料

要事前申し込み
(2月25日まで)

プログラム

3月1日(土) 17:00-19:00 対面受付開始 16:30



Cynthia Kraus

対面とオンラインのハイブリッド開催 (zoom利用)

講演「性器改造に対する非民族中心的アプローチの展開」

(Developing a non-ethnocentric approach to genital modification:
International cases of "female genital mutilation," clitoral reconstruction,
intersex surgery and male circumcision)

講師 シンシア・クラウス (ローザンヌ大学・哲学者)

←一部通訳つき

3月2日(日) 9:15-17:00

- 9:00-9:15 ● 参加受付
- 9:15-9:20 ● ウェルカムスピーチ & ご案内
- 9:20-11:20 ● 午前の部 1
- 11:20-11:30 ● 休憩
- 11:30-13:00 ● 午前の部 2
- 13:00-14:00 ● 昼休憩
- 14:00-16:50 ● 午後の部
- 16:50-17:00 ● 閉会のスピーチ



Bodily Integrity Lectures Series I
(Seoul National University, Mar 2024)

参加登録

右のQRコードもしくは下記のURLに
アクセスしてご登録ください

<https://integrity2025.my.canva.site>



↑ 参加登録 ↑



↑ シンポジウム ↑
ウェブサイト



↑ 会場アクセス ↑

登壇者

Hangyeore **CHOE**, JD (韓国・NOCIRC)
Brian D. **EARP**, PhD (シンガポール国立大学)
Dr. **NO CIRC**, MD (韓国・NOCIRC)
Yuko **HIGASHI**, PhD (大阪公立大学)
Shin **IMAI**, MD (SRHケアクリニック静岡)
Cynthia **KRAUS**, PhD (ローザンヌ大学)
Yukio **MIYAWAKI**, PhD (大阪公立大学)
Daisuke **ONUKI** (東海大学)
Myun-Geol **PANG**, PhD (中央大学校)

シンポジウムの内容についての
お問い合わせ先: higashi@omu.ac.jp

会場へのアクセス

大阪公立大学 I-siteなんば
大阪市浪速区敷津東2-1-41
東海なんば第一ビル2F

主催・共催団体

主催：大阪公立大学 現代システム科学研究科／女性学研究センター
共催：ローザンヌ大学社会政治学部・STS研究所、シンガポール国立大学、
性と文化プロジェクト-S.CulPure、科研費基盤研究C (24K15562)





3月15日(土)～16日(日)



日本GI(性別不合)学会第26回研究大会・総会(旧・GID学会)

倫理的正しさと科学的事実の調和

— 社会構築主義と生物・心理・社会モデル —

主な内容

特別講演

- ・「精神分析・臨床心理学とLGBTQ」及川卓
- ・「認識の多面性とその統合：ジェンダーと近現代科学の世界観を題材に」坂口菊恵

理事長講演

- ・「ガイドライン第5版について」中塚幹也

シンポジウム

- ・性別不合に関する法律的な諸課題
- ・トランスヘイトを巡る状況－現状と対処のあり方－
- ・WPATH2024(リスボン)参加報告会
- ・性別不合に取り組む若手医師の活動 ほか

会場

お茶の水女子大学(東京都文京区大塚2-1-1 / 東京メトロ丸ノ内線茗荷谷駅から徒歩7分)

参加費・申込み先等

プログラムの詳細・参加費・申込み方法は、以下から確認してください <http://gi26.tokyo/special/?id=42942>
 問合せ先/事務局：お茶の水女子大学心理学科石丸研究室 E-mail: gi26ocha@gmail.com



好評発売中!

ピアカウンセリング 実践ガイドブック

日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会／高村壽子 編著

主な内容

◆ B5判：160頁 頒価3000円(税込)

第1章 なぜ、ピアカウンセリングなのか——主体的な生き方を支える健康教育の一方法

第2章 主体的な生き方を支えるピアカウンセラーの養成

2-1 ピアカウンセラーになるために

2-2 カリキュラム展開の実例 I

2-3 カリキュラム展開の実例 II—セクシュアリティについて

第3章 主体的な生き方を支えるピアカウンセリング活動実践紹介——ピアカウンセリング手法による性=生の健康教育を中心に

中学校のピアエデュケーション(対面方式)、中学校のピアエデュケーション(遠隔方式)、高校のピアカウンセリング/ピアエデュケーション(ハイブリッド方式)、駅ナカ保健室(ピアカフェ)、教育支援センター(不登校適応指導教室)におけるピア活動、特別支援学校ピアエデュケーション、リフレッシュママクラス®、グループピアカウンセリング講座

第4章 コロナ禍におけるピアカウンセリング養成講座の評価

第5章 ピアカウンセリング活動を支えるしくみ/システム

※送料等は、ホームページを参照してください。

◆ JASE ホームページ <https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。
 または、Email info_jase@faje.or.jp
 TEL 03-5801-6788 FAX 03-5801-6677

